

## 1) 事業2 ふれあい支援活動

### 第2分科会報告

不登校児童生徒の適応指導教室における「ふれあい支援活動」の諸問題

編集責任 豊嶋秋彦

#### 1. 概要

第2分科会では、「不登校生徒に対する適応支援」というかなり難しい活動の教育心理臨床的な問題点にしぼり、休憩無しで18時30分までのフリー討論が行われた。司会者が必要に応じて臨機に資料を提出する方がよいと判断し、会場を急遽、司会者の研究室に近い心理学科演習室に変更したが、演習室のテーブルを囲んでという形式が学生の緊張を解いただけでなくディスカッサントにも自由に発言できる雰囲気醸し出し、市の適応指導教室、県の適応指導教室、学生の三者相互研修会の趣を呈した。

通常講義が並行して行われていたこともあって適応支援学生の参加が制約されたし、昨年度は不登校生徒対象の心理臨床活動を現に実施している心理学科大学院生が指定発言と研究報告をしてくれたのだが、これも通常講義や学外での臨床実習、学部相談室での相談活動のために参加できなかった。このように、学生・院生の参加が少なかったのは残念だが、少人数であったことが却って気の措けない討論を活性化した面もある。

分科会記録は学生諸君がテープ起こしをしたものを編者の責任でまとめなおしてある。講演や討論の記録は一般に、よほど口演慣れした人のものでない限り、その場を共有していた人でないと読みとりにくいし、方言がはいると一層何のことやら不分明になるからである。また、話題の展開に応じた小見出しも付けておいた。最後の司会発言は、配布した数葉の研究データや図表の解説であるが、配付資料の掲載は省略する。未公表のものもあるが、以下の「関連文献」に示すものは発表済みであるので、関心の向きは参照されたい。

#### 関連文献

長谷川恵子・豊嶋秋彦 2000, 適応指導教室におけるフレンドシップ事業の効果研究  
東北心理学研究 50, pp46.

長谷川恵子 2001, 不登校生徒及び適応支援者の適応指導教室における体験の機能 - 適応支援者の変容を中心に - 弘前大学大学院教育学研究科教育実践研究研究集録5, pp22-24.

長谷川恵子・豊嶋秋彦 2001 不登校生徒との関わり体験が適応支援者に及ぼす機能  
東北心理学研究 51 (印刷中).

#### 2. 第二分科会討論記録

##### 第二分科会ディスカッサント

##### 弘前市教育委員会

弘前市学校適応指導教室

指導員 鈴木 弘

教育研究所

指導主事 田澤 桂司

##### 青森県総合学校教育センター

教育相談課こころの教育相談センター

指導主事 榊 彰久

同上

指導主事 七戸 完三郎

第二分科会参加者

ふれあい支援活動参加学生

フレンドシップ事業運営委員・幼児教育講座

助教授 吉川 友能

司会：フレンドシップ事業運営委員・学校教育講座 兼 附属教育実践総合センター

豊嶋 秋彦

## 青森県教委と弘前市教委の適応指導教室におけるスタッフ体制の違い

豊嶋：学生の皆さんはここにお出でになっている榊、七戸両先生が指導しておられる「こころの教育相談センター」についてご存知ないでしょうが、学生や大学院生も適応支援スタッフとして入っており、スタッフ体制や生徒理解のシステムに相当の工夫をされています。このセンターには私も開設準備の段階から関わってきておりますので、最初に私の法から紹介したあと、フリー討論にはいりたいと思います。センターは青森県教育委員会が開設している適応指導教室で、担当指導主事の先生が3名、それに加えて、12名の指導員...、学校の教員OBの方もいらっしゃる、主婦の方もいらっしゃる、弘大の院生や学生もいて、60歳台から21・22歳までかなり幅広いスタッフを非常勤嘱託として擁しています。指導員という職名の人は全員が非常勤嘱託で、ローテーション勤務体制をとっており、12名が毎日いるわけではありません。ふだんの日は全部で7～8名のスタッフ、指導主事の方は教育委員会の仕事が入っていて常時3名というわけにはいかないのですが、嘱託の人が一日平均4～5名、計7～8名で子供達を指導しています。嘱託指導員の方も毎日勤務ではなく、指導主事の先生もずっと見ていられるわけではないので、月1回、情報交換会をきちんとやっています。またかなり専門的な事例研究会などもやっているのですが、月1回の情報交換会で『実はあの子が...』と言っても、これは間に合わないのです、それを補うために新しい試みをしているということです。その辺りから。（编者註 情報交換会、事例研究会の双方とも、臨床心理士である大学教官と精神科医が臨席しスーパービジョンを行っている）

七戸：毎日スタッフが入れ替わるので、まず、毎日、事前・事後のスタッフ打ち合わせをしております。その子の今の状態を情報交換するんですよ。次に、生徒一人ひとりについてノートを作って日々の状態、エピソードを記録してもらう。この二つを毎日引き継いでいきます。月1回の情報交換会、指導員会議と言いますが、そこでは、その子ども達の状態をある座標上での位置づけや、集団活動の面、学習意欲の面、対人関係の面などのチェックと、現況の手短かな要約文を書いた一覧表を作って、一人ひとりに対する今後の関わり、来月からの関わりをどうやるかを話し合っています。

榊：毎日のスタッフ打ち合わせは朝と帰りの2回です。今年から始めました。内容は、前日からの伝達事項、それから緊急性のあるもの、例えば、自傷行為が見られたとか、そ

れじゃあ対応どうしようか、と具体的な動きを決める。帰りは、その日一日の動きで気になったことを出してもらい、次の日の朝伝える。

ノートについては、指導員一人一人が、子供一人一人ごとのファイルに、子供の活動状況で気付いたことを書いていくんですね。3行から5行くらいですが、それがすごく生かされてますね。例えば、指導員4人が勤務した日なら、4人の目で子供一人を見ているわけですから。それは相談担当指導主事にとって、親に対してのケアにも、子供のケアにも非常に参考になりますね。

ほかに、嘱託指導員は関係しませんが、「親の集い」を年に5回、「学級担任の会」を学期単位で年3回、難しい事例に焦点を当てた事例研究会を年3回やっています。

豊嶋：一人一人のカルテのようなノートに書いていくのは、いいシステムだと思います。

榊：あれはすごく生かされますね。

鈴木：様式や内容がちょっと違うと思いますが、私達も、今年の2学期から、様々な角度から、気が付いたことをメモしたり、チェックすることを、指導員・職員の中でやっています。毎日のように緊急を要することや『あの子は今日こうだ』といったことを情報交換しあっています。ただ、その情報は適応支援の学生さんには出ていかない…。朝の打ち合わせ時間も違うし、学生さんは9時過ぎに来るが、私達は8時50分から打ち合わせが始まる。週1回来る学生さんもおれば、都合悪いと2週や3週に1回になる人もあるわけで、そこをどうやっていけばいいのかなあ、と思って…。11月からでしたか、学生さん達に主担当制をやってみています。私はあの子の担当、あの子を面倒見るといような形でやっているの、その情報交換をやるかと話しているんですが、17、8人の学生さんと一斉に情報交換の場を、ということになると…。

榊：いっせいには難しいでしょうが、考え方によっては一人の子を18人の目で見るとなると、すごく貴重だなんて思いますよね。

豊嶋：そうですね。『こういうふうにも見えるのか』っていう…。

榊：私たちの方では生徒の個人ファイルを場所を決めて置いておき、それはスタッフなら誰でも見れるということにしています。そういうことは効果的かなって思いますね。

鈴木：もう工夫してみたいと思います。

七戸：私たちの方では、さらに工夫して、一名の方にはその週のチーフとして一週間通してきていただくようにしました。他の方はほとんど週2回ぐらい来る程度で交代になりますので、その間の様子が分からない。その点は弘前の適応指導教室に学生さん達が時々来られるのと似たような状況ですよ。

鈴木、田澤、学生一同：そうですね。

七戸：そこを、始業前に、その間の様子を書いたファイルを見ながら『ああ、こういう状態なんだな』と把握して、「週間チーフ」からの情報ももらって、それから援助に入る形になってます。

榊：時々来る人のほうが敏感に子供の変化を感じるということもありますよ。毎日接していると麻痺する部分がありますね。時々来る人から指摘されて私たちがはっと気付くことがあります。少し話が変わりますが、生徒との相性の問題もありますね。この学生さんには家庭のことまで話せるとか…、それで、来るのを待っているとか。

鈴木：特別な研修会とかではなくて、日常、普段にもっと話し合いをして情報交換するやり方をしようよと、私達は、他の指導員の先生方にも呼びかけているのですが、学生さんのほうから指導員の先生方に『これどうなっているんでしょうか』とか『どうすればいいんでしょうか』とか『ここ知りたいんですけど』とか質問してくることは、今までほとんどないんだけど、自分達からは聞きにくいでしょ？。私達の方から『この時間帯は適応支援活動はいいから、ちょっと私が話をしたい』というように、こっちから声を掛けていった方がやりやすいのかなあ？。私達としてはそうしたいと思っているんだが、進まない。学生さんが来たり来なかったりするから、来たときにその学生さんを担当する先生が休んでいるといったこともあるし、つい時間が過ぎていく感じを私達はしているんだけど

ども、ちょっともったいないなという思いです。そんな普段の情報交換をして、それに、今話題になったカルテみたいなノートも見ながらやっていくといいのではないか思うけれども。学生さんの方も聞きたいとなんと思っているわけ？。『聞きたい聞きたい、聞こう聞こう』と思っても、その機会がないわけ？。

学生一同：（うなづく）

榊：私たちのセンターでは、特に学生の指導員さんの場合、学生さんの目から見てすごく心配だということでは直接、口頭で、聞きに来ますね。やはり胸のうちに止めて置けないんでしょう。その人の判断で聞きに来る。でない、抱え込んで帰っちゃうから。

七戸：そうですね。『ちょっと・・・』という形で担当指導主事のところに来て、自傷行為の話をしていったとか、家に帰りたくないと言っていたとかを話してくれる。学生さんは生徒と年代が近いから、我々には言いにくいことも学生さんにはけっこう話してくれて...

榊：恋愛話とかね。我々には言わないけれども。

七戸：我々の良い情報源になっている部分もあります。

鈴木：今のような学生さんの気になることについて私に相談してくれた学生さんはこれまでに2、3人はいたのです。その時、私は大変ありがたい情報だから職員の方々に紹介していたんだけど、そういうことは連絡してくれればありがたいし、我々もまた言いやすい雰囲気を作っていかなければいけないのだけれども、必ずしもそういかないこともあって、学生さんが困っていることもあるかもしれない。やりづらい思いをしているかもしれない。

学生（支援2年目の4年生女子）：できれば帰る前に5分でも10分でもいいので、気になることとかじゃなくても、生徒みんなのことじゃなくても、『今日自分は誰々君と話して、誰々君はこういう様子だった、こういう感じでした』ということだけでも報告する時間があればいいなあと思うんですが...。それから、朝も、例えば『誰々君のおばあちゃんが亡くなって今日は元気がないから、勉強とか強制しないように』と言われれば、そういうふうに分かるんですけど、それを知らないで、『何で今日はそんなにやらないの』という言葉をかけてしまったりしたこともありました。そういうところを先生が見かけて、『おばあちゃんが亡くなって元気ないみたいだから』というのをそこで初めて知ったりすることもあるので...。ほんのちょっとの時間でいいんですけど時間があればなああって...。それに、今年度始めにノートを貰って、それに「今日こういうことがあって」というのを書き溜めているんですが、それを外に出すことがなくて、ただただ溜まっていくだけで、その状況、情報を公開する機会がないので、それ公開できたらと思いますけど。

鈴木：いいね。私もそういうことを望んではいらんだ。望んでいながら思うようにできない...。今度12月の事例研究会で、学生さん達から見た生徒のことについて語り合うことにはなっているんだけど、やっぱり日常ですね、普段の連絡、情報交換がしっかりできればいいね。痛いところをつかれました。これから改善していきましょう。

七戸：センターでは、1日の適応指導の終わりに5分から10分くらいの情報交換もやっています。時には長くなりますが、ほとんど5分から10分です。

学生（支援1年目の3年生女子）：そのときは子供は何をしているんですか？

榊：活動が一旦終わった状態になっています。

学生（同上）：生徒はもう帰ってるのですか？

榊：バスがあるんですよ。駅までの。活動が終わってバスが出るまで15分くらいあるので、その間にやっています。ですから情報交換をやって、バスの見送りに間に合うんですよ。我々は指導員に『バスの見送りをしてほしい』とは言っていないのですが、指導員のかたは自然に、毎日行ってバイバイをしています。それにはだいたい間に合っていますね。だから5分か10分で終わっているんですよ。

七戸：ある程度、時間限定でやらないと、だらだら長くなったり、何でも出てくるから、

本当に重点絞って、効率的にやるのもいいと思っています。

榊：ですから、活動終了後の指導員ミーティングは、緊急性がある問題と、明日に生かすこと、この二点に絞っているんです。で、朝は活動直前、15分前に設定していますので翌日も情報交換する時間はあるわけです。

鈴木：私達の場合は、学生さん達が来てくれる時間帯は画一的にしていけないから、1時間目の学習の時間が始まってから来る学生さんもいるし、その時間帯には来れない人もいます。学習の時間にいることのできる学生さんが1人や2人という日もある。学習室には学生さんが2・3人いてくれればいいんだから、もしこの時間帯に3・4人の学生さんが来ていれば、学修支援は2・3人に委せて、あとの1人と我々指導員がじっくり情報交換する、という方式でもいいわけだが...

榊：こちらでは学生さんの出勤管理はどうなんでしょう？。出勤簿とかがあるのですか？。来れば先生方がいらっしゃる部屋に顔を出すとかは？。

鈴木：出勤簿というか...、丸をつけるだけのもので...

田澤：出席簿ですね。

榊：センター指導員にはお金を払ってるので、出勤という形になっちゃうんですが、そこが違いますね。

豊嶋：時間管理の問題では、センターでは駅から遠いので専用バスでないと来れないし帰れない。そこで、子供達も『何時になると帰んなきゃ』っていう気持ちになるわけですね。だから、だらだらっていうのがないんです。

田澤：私たちの方では、交通が比較的便利なので、逆に午後から来ると子供達もいますよね。

鈴木：最近はね。午後からでもいいということにしましたので...

田澤：3時くらいまでならオーケーということですね。午前中で適応指導活動は終わるけれども、例えば、カードに夢中になってる男子グループが残っていると、3時頃まで残る子どもたちも居ます。

七戸：朝、起きられない子とかは？

田澤：（早い時間帯の）学習活動はできませんがちゃんと来ている子もいます。また、最近、3年生になって残って勉強する生徒も出ています。進路を考えてということもあるでしょうし、ひょっとしたら、家に帰っても退屈とか、家に帰りたくないとか、なのかも知れませんが...

七戸：家庭の事情もあって、帰りたくないとか...

田澤：物理的に帰れないということもあります。

榊：帰りたくないというのは、センターでも必ずありますよ。でもやっぱり、バスが出る関係もあって、切ってあげるんです。

田澤：センターは生徒達は何時頃まで残っていてよいのでしょうか...？。

榊：3時ですが、その後30分もいる生徒もいたり...

七戸：せいぜいそれくらいまでは大目に見てあげています。

榊：ソフトに『まだいるんですか』という感じで時間を意識させています...

田澤：時間の問題からは少し離れますが、情報交換のことで、どうでしょう？。来れる時間の早い遅いもありますので、学生さんに帰り際、ノートに2・3行、例えば『今日は何人の子どもにこんな風に関わった』と書いていくとか、生徒個人ごとのノートにして書いていく、というのは？。日付と内容とどなたが書いたかも書いてもらう。生徒個人ごとのノートがあれば、指導員の方から『実は』という情報を書き添えておくのもよいと思いますし。そうすれば緊急の問題にも今以上の対応がつくし...。また、学生さん各自が書き溜めたノートを持ってきてもらって、集約して検討する機会を作るとか。

## 不登校生徒の心を開くには - 教師的かわりと「ななめの関係」 -

鈴木：「ななめの関係」は非常に大切なことに思うわけ。で、私にはひとつ悩みがあって、我々指導員は学校の教師を長くやってきた人達だから、先生という意識がなかなか抜けない。それは悪いことではないし、きちっとすることも必要だろうが、教える側と教えられる側、注意する側と注意される側といった感覚では不登校生徒の適応指導は不十分だと私は思っているわけ。この分科会用の配付資料（**编者註** 通級生徒が適応指導教室で意欲的になる要因 - 「適応促進要因」 - と、意欲が低下する要因 - 「適応抑制要因」 - について、昨年度の支援学生から調査したデータのことである）を読んでも、指導員や大学生が少し一方的に強制すると子ども達の動きが止まる、マイナスになると書いてある、その通りなので、「何十年も学校の先生をやっていると染み付いてしまった態度を少しでも和らげてほしい」と願いながら指導員の先生方に発言して、指導員の先生方に考えてもらってはいるんだけど、なかなか染み付いたものは簡単には変わらない。私はそこで、『この子はこう指導した方がいい』とか、『この子はこうだ、こういう特徴がある』『こういう検査したら』とか言う前に、「おはよう」でもいい、「さよなら」でもいい、「今日調子いいか」とかでもいい、もっと子ども達に優しく、温かく会話すること、子どもをしっかりみることが、我々60歳過ぎても、一番必要なんじゃないかなという気持ちで、他の指導員の先生と話をしてきた。けれどまだちょっと足りないかと思って、二学期になってからもさきほどの気持ちを言ったりなどやってきた…。こういうふうに、「ななめの関係」にしよう思っているわけだが、なかなかそうはならない…。

榊：うちにもやはり教師タイプで、教師のにおいの強い方もいるんですよ。元校長さんも3人もいますから。でも、同じ校長さん出身でも雰囲気違うんですよ。鈴木先生のおっしゃったような典型的なタイプもいるんですが、変わるんですよ。スタッフみんな私を含めて変わってきました。変わるんですよ。なぜかと考えると、子どもとふれあっているからだろうと。でないと変わらないと思います。一ヶ月かな、本当に変わるんですよ。スタッフ同士でもそのことは認めています。「子どもに勉強の話しかしなかった人が、別な話ができるようになった、ゲームの話ができるようになった」とかね。60過ぎの元校長クラスの人でも変わっていくんですよ。実は、変わらない方もおりましたが、やっぱりその方は辞めてしまいましたね。子どもが寄って来ないんですよ。自分から子どもに入っていけませんから当然子ども達も寄ってこない。変わらないまま辞めました。適応指導教室というところはお互いに成長する場ではないでしょうか。

豊嶋：本当にそう感じますね。指導員の先生方も少しずつ変わっていくし、皆さん（学生）も、関わり始めと今とでは相当違って来ているだろうし、子どもももちろん変わっていく。一方的に引っ張る場ではなくて、一緒に育ち合う場が適応指導教室の本当にいいところではないかと感じています。

学生（支援1年目の4年生女子）：最初って、溶け込んでいこうとしても、すぐ入れるわけではないですよね。子どもはどうしたら受け入れてくれる反応に変わってくるのですか。

榊：誰もが悩むところなんでしょうが、個性が違いますから、アプローチの仕方、入り方はみんな違うんですよ。ずっと入れる方もいますし、教師型のタイプは時間がかかりますね。でもそれでも（自分の入り方を）見つけるんですよ。いろんな会話をしてみとか。遊びやスポーツとかは入りやすいと思います。

鈴木：すぐ受け入れてもらえるというのは、特に3年生では少し難しいと思うんだよね。というのは3年生は授業が沢山あって、適応指導教室にあまり来られないわけだから…、1週間に1回のペースだと1回休むと2週に1回になる（**编者註** フレンドシップ事業としては週1回の支援であるが、4年生になると講義が少なくなるので、頻りに適応指導教室に通う学生が増えてくる）。去年、こんなことを言っていた学生さんがいましたよ。「私は最初、生徒の話を

聞くことが大事だと思って、ただなんでも『うん、うん』って言えばいいわけではないだろうとは思っていたけれども、(ではどうするか) 答が出ないので、あまり考えず、とにかく一日でも多く適応指導教室に行こうと考え、4年生になり授業が減ったので適応指導教室に何回も行くように努めた。そうやってはじめて、聴くというのは単になんでもかんでも『うん、うん』ではないことが見えてきたと。全体シンポジウムで豊嶋先生がお話しになっていたことに気がついた」と話してくれた学生さんがありましたよ。(编者註 全体シンポジウムで豊嶋は、これまでの適応指導教室でのフレンドシップ事業が学生の成長に及ぼす効果についての実証的分析の結果の基づいて、“ほとんどの学生が適応支援活動の開始時に生徒達との交流の仕方に戸惑い、試行錯誤する中で、ある時点で、「偽共感 - fake empathy - 」とでも評すべき《表面的な許容・容認的態度での応答スタイル》を身に付けるが、その「偽」性に気づくのは、積極的な構えによる支援を長期に展開したり、生徒の内面的感情への焦点づけができるようになってからである” 旨の指摘を行った。)

榊：私どもの指導日誌から見ると、生徒とのふれあいのきっかけは、声かけ。声かけすると、その日でなくても次に生徒から反応がきたりする。それとかかわる上で認める、褒めるというのは効果的ですね。笑顔がでてきますから。基本的にはそういうところは最低限おさえなくてはいいと思いますよね。

豊嶋：それと関係して、こちらがどう関わろうか距離を測っているときには、子どもも多分そうだと思うんです。かなり病的で人間関係から完全に引きこもっている子どもはちょっと別ですけども、そうでなければ『あ、新しい学生がきた。どう関わろうかな。』と距離を測っている。子どもの方からは動きにくいと思うから、こちらの方で直球投げたりカーブ投げたり、試行錯誤して一つの回路が見つかると、その子とつながって、その子とつながるとその子とつながっている他の子ともつながっていけるというのがあると思うんですよ。だから、いきなり皆とつながるのではなくて、1人とつながってそこから<いもずる式>につながるというやり方もあるでしょう。

鈴木：こういう生徒いましたよ。(集団活動ができずに) 個室にいたんだけど、閉じこもっているというわけではなく、適応指導教室に来たばかりの不安もあるだろうし、そこに学生さんがとても優しく声かけてくれて、とてもほっとしたって。そういうように学生さんからどう声かけするかは、すごく大事なことだと思います。『生徒が寄って来ないから私も話すことがない』というのは、それは違う。

七戸：センターの指導員さんでも新しい人は、不登校のお子さんということで意識过剩になって、『こうすれば傷つくんじゃないか、どう関わればいいのか』と気を遣い過ぎてかえって中に入れられない方もいます。だけど、それが抜けると、力が抜けると、すっとうまくいく。フィルターをかけて見ているというか、そういう目で気遣いしていると、なかなか心を開いてくれないんじゃないかな。今年度から来られた指導員も一学期はそうだったんだけど、『やっとわかってきた』と日誌に書いています。ただ、やはり明るい人がいいですね。子ども達も入っていきけるし。学校でもそうですが...

榊：ジョークもいいと言いますが...

七戸：ユーモアね。かたすぎるとやはり...

榊：ジョークがすごく効果的ということは、私、我々のアドバイザーの方から指摘されたんですけど、なかなか言えないんですよ。

田澤：学生さんを見ているとすごくまじめなんですよ。自分で碎けてばか作るのはできないかもしれないけれど、自分なりのアプローチの仕方はあるわけですよ。でも、私はよく学生さんが我慢していると思います。子ども達は予想以上にきついことを学生さんに言っているんだけど、学生達は結構受け止めているんです。さすがです。乙女心を傷つける場面も実はあるんですけど、ニコニコ受け止めているんですよ。「私だってちょっと傷ついたわ」くらいはたまに言っているいいのでは...。しかしそうやってしまうと、子どもが行ってしまうんじゃないかという心配もあるだろうし。

鈴木：ある程度ふれあいができるくと『そういうのはちょっと不愉快だなあ』って軽

く言えるかもしれない。

田澤：その子とつながっているのを感じとれるといろんなことが言える。学生さんが最初のうち（傷つきを）顔に出さずに明るく一生懸命向かっているのには感心します。

鈴木：私は、去年の前半頃までは「学生さんにただただ感謝」という気持ちでいっぱいでしたよ。子ども達は『今日は　　さん来るの?』と、学生さん達を待っているんですよ。で、来れば、教室にいても学生さんの名前を呼んで教室を出てでも迎えに行くでしょ。それほど学生さんを待っている。『学生さんが行くなら行事に参加するけど、行かないなら私も行かない。』という子どももいるので、学生さんいることの影響が非常に大きいと思っている。ただ、去年の後半からは、学生さんにとってこの経験がどれほどプラスになっていくのか、将来プラスになっていくのかを考えるようになったんですよ。こうした活動に参加したことによって、良い、豊かな教師になってくれればいい。そういう、教師になるため心構えのようなものを、ここで学生さん達が作っていくことが必要なんじゃないかなと。そうした意味では、もっと積極的に質問でもなんでもしてくれる、そういうことがあってくれてもいいと思うんだけど。

### 「枠」と「守秘」の問題

榊：違う話になりますが、子どものことを抱えたまま家に帰ることはないでしょう。できればスタッフ同士で話すことで、もち帰らない方がいいと思いますが。記録してから帰ることも、抱えずに置いて行くことになるんですよ。

田澤：その時に、例えば『親に言わないで、先生方にも言わないで、あなたにだけお話しするわ』ということあるわけですよ。自分のことをその学生さんだけに打ち明けることは子どもにとってはプラスかも知れない、しかし、それを聞いた学生さんの方では、『自分の心に留めてしまうかどうかでしょうか』というのがありますよね。

豊嶋：そこは相当に重いところですよ。『先生方には言わないで』とか『　　さんにしか言わないよ』とかなんだけど、非行とか犯罪被害につながりかねない問題とか、精神疾患絡みのことを『他の人には絶対に言わないで』に生徒から言われるってことない？

学生（支援2年目の4年生女子）：そこまでは言われなくても、『このことは多分、私だから言ってくれているんだな』と感じたら、どうしたらいいんだろうという迷いがあっても『指導員の先生に言っただけいいかな、それはその子と自分との信頼関係かな』って思って言えないこともあります。

田澤：言えないことが多いですよ。自分だけに言ってくれたんだと思ったことはね。それを言ってしまって、その子にまとまって伝わっていくと、その子との関係はそこで終わってしまうという問題もあるし。かといって、やはり伝えなきゃいけないという面もあるし。

七戸：私のところで、女子生徒が「メル友の少年に会いに行きたい」と若い女性指導員に打ち明けたんですが、我々指導主事にも親にも秘密なんですよ。しかしそれは危険なことですよ。指導員の方からは指導主事に話してもらったんですが、実は親も察知して、親からの相談をこちらが受けて、ということもありました。その時は、我々はそのことは聞いていないということにして、我々は指導員を通してアドバイスしてあげるやり方をしています。一人で抱え込むと判断を間違えることもあるので、我々と相談することが大切かなと思います。ただ、些細なこと、子ども達の恋愛関係と言った程度の悩みであれば学生さんが自分の範囲で納めてもいいでしょうけど、その辺の判断に困ったら相談した方がいいでしょう。

榊：今の問題は守秘の問題の他に、枠の問題も絡んでいますね。秘密については、その生徒との関わり合いの中で自分で何とかできる、止めておける状態のものであればいいでしょうけど。センターでもあったんですが、帰宅後にかかわるといいうのは枠外になっ

ちゃうので危険ですね。抱え込めないでしょ、自分ではね。秘密のことで、どんどん相手の方からしゃべって来ると抱え込めない。センターでも指導員にお願いしてるんですよ、「帰宅後に個人的に携帯電話で相談を受けたりするのはやめて下さい。」と。ここでの（編者註 “ 適応指導教室という場と指導の時間帯という枠内 ” という意味）関わりなんですよ。

豊嶋：つい、携帯電話の番号を教えられたり、教えたりということがあるんだけど、携帯の番号を教えるっていうことは、24時間あなたを支えますよということなんです。それくらいの覚悟があればやって下さい。で、覚悟がないんならやるなと、とても簡単な…、「あっ、しまった、教えちゃってる」という顔してる人が何人かこの場にいる…。

鈴木：なんでもやさしく対応しようと思うから、聞かれたらすぐ教える学生さんが結構いるんだよね、あれは気になるんだけどね。

豊嶋：結局は、本当に自分が支えきるんだと、何があっても支えきるんだと、絶対この子は守るぞというんだったらね、「秘密！」と言われたことも絶対言わないし、24時間対応でもいいんですけど、それは、なかなかできない。としたら、どこかで線を引くことが必要です。線を引かないでやっていると、ズルズルで、結局支えきれもしないし、かえって相手を傷つけたり、こちらも傷ついたりということも…。

吉川：そのときに、内緒でその話をちゃんと受け止める指導員との位置というか、信頼関係が問題になりますよね。具体的にどういうケア関係に置くのかという問題があると思うんですよ。それがないと、学生に話したことが広がって、結局（関係が）だめになっちゃうということがありますよね。県のセンターの場合には、そういう秘密の重要事項…、危険であることとか、について、この人が必ず聞いて必ず守秘にしておくといった体制をしいていられるのか…？。

榊：守秘義務を守ることにについては、指導員さん達には徹底させています。それから、我々指導主事の段階では、かなりの情報を持っていますけれども、指導員さん方にはここは出せないなっていう部分がありますから、そこは線引きしてやっていますね。しかし、センターでの直接の指導に関連する部分は、共通理解しておきます。

吉川：その線をどこにするかが…。守秘義務がわかっていながらも、誰がそれに関わって、どの範囲までで収めておくのかという問題が…。僕がもし学生だったら、怖くて、『他の人に言おうか言うまいか』と迷うかなってありますね。そこの体制ができていれば、その（この人が必ず聞いて必ず守秘する、という立場の）人が責任を持っている、という人に、言いますよね、危険なこととか、なんかを。

榊：我々指導主事の場合は、指導員や生徒の会話とかで気づくことが多いんですけどもね。それをキャッチしたときには、全体の中で、例えば、携帯電話の問題などは、再度確認するんですよ。しかし、聞こえてこないと、なかなか…。

吉川：携帯電話の問題で言うと、携帯電話でまで相談や話しをしていることを、他の人達や指導員には言わないで、自分で抱え込んでいる。学生がそれを言い出せるためには、それを受け止めるべき人が責任を持ってちゃんととってもらえるのか？が問題ですよ。守秘の義務と、その情報を（スタッフ間で共有するとしたら）どこまで広げていいのかっていうことと、それを聞いた責任ある人がどこまで止めるのか、…1人や2人で止めとくとか。指導主事だけが知って他の人には知らせないという情報についても、（体制が）はっきりしていれば言えるのではないかと、少しは。県の方は、一応、プロの人が指導員で、お金を出してやっているから、それなりに言えるのではないかなって思いますが…。

榊：意識付けはかなりしてるんです、お金を払ってやってもらってますから。

鈴木：私達の方は、無償だからね。

吉川：だから、そこで必ず守られるかっていうことは、かなり危ないですよ。

七戸：そうですね。

吉川：だから、こういうことは、たくさんきちんと言わないと。（学生が生徒から聞いてしまった秘密の話を責任持って受けとめる）人を決めておかないといけないのでは？

いや、決めておいても危ないかな...？。

七戸：例えば、生徒が、指導員のAさんにだけ話して、『秘密にして！』って言ったのに、Aさんが他のスタッフに話したとします。『お互いに聞かなかったことにしておきましょう』と言っている間、子どもと接している間に、つい、出ちゃうことってありますよね。だから、本当に危険性があるとか、これを知っておかないとまずいなということだったら、他のスタッフに話しますけど、すべて情報が共有されるのも問題があるかなと。命に関わること、特に女子にとっては危険なことは、すぐ全員に周知してますけど...。

鈴木：(学生に対して)今日はとっても勉強になるね。学生さんもっとたくさん参加すれば良かったのにね。

豊嶋：いや、たくさん参加してると却って話せないということもありますから...。今の話題になっている秘密の問題は、自分では抱えきれなくなった時に相談できる人がいればいいわけですよね。ただ、「指導員の先生には絶対話さないで！」って言われてるやつを、指導員の先生に「実は...」と話すのは抵抗があると思うのね。その時に、第三者というか、スーパーバイズしてくれる人がいて、「それは、あなたの範囲内に収めといて、指し当たってこう動いてみたら」とか、「いや、それは、重要だから指導員の先生にちゃんと話して」というよう方向付けをしてくれるスタッフがいると本当はいいかなと思います。ですから指導員という職掌以外に、その辺の方向付けをしてくれる人ですね...。実は、支援学生にも、自分で抱えきれなくなると私のところに来る人がいます。私の方で聞いて、「それはあなたの範囲の中で収めて、こういうふうに関わってみて、それでもだめだったらまた私の所に来て」とか、「指導員の先生に言いいなさい」というように振っているんですが、これは、人数が多くなるとできない。支援学生のうち、私のゼミの4人は、私のタイムテーブルを知っている、...ゼミ生でなくとも私の研究室のドアには、何月何日は何時何分から何時何分までの間しかいないといった詳しい日程表が貼ってあるのでわかるんですが、とにかくその時間まで待っててくれれば、夜の10時11時まで待っていてくれる学生もいます、そういうふうにしてもらえればスーパーバイズできます。といっても、これが支援学生17人が全員入れ替わり立ち替わりになるととても無理なんだけれども、上手くタイミングがあえば、ということですね。心理学科の大学院生で臨床やってる人なら、ある程度その役割は勤められるかなという感じはしていますが...

それから、もうひとつ、「これは指導員の先生に言ったほうがいいな」と思ったときに、これは中学生だとちょっと難しいかもしれませんが、学生相談で守秘を前提に聞いていても、例えば自殺とか、中学生なら自傷とかの、指導責任のある教官や家族の方に知っておいてもらわないと大変なことになる」という問題の時には、「これは先生に言っといた方がいいんじゃないの？」と振るんですよ、本人に。そして「あなたの口から言ってみたら？」とか「言えないんだったら、一緒に行こうか？」とか、「こうこう、かくかく、しかじかという部分だけは私の方から伝えようか」と。「こうこう、しかじか」という部分は文章化して示す、この部分だけ伝えると限定する。(もっとも、教官の人柄を知っていて、あいつには知らせない方がいいと判断することもありますけどね。)こんな方法が結構効くんですよ。こちらとの信頼関係があれば、「あんたがそこまで言うんだったら、ちょっとだったらいいとか」。こんな方法もありますよということを頭のどこかにしまっておくと、ひょっとすると、有効な子もいるかも知れない。

今日は、これまでのフレンドシップ事業シンポジウムにはないレベルでケース検討会のようになっていますが、時間の関係もありますので、学生さんがこの機会にぜひ聞いて欲しいことなどありませんか。

学生(支援2年目の4年生女子)：さっきの生徒一人一人のカルテの話に戻ってしまうんですが、私はノートに書き溜めているんですが、生徒についての情報交換の場がもっとあればいいなと思います。ただ、行って、子どもたちと一緒に活動するだけじゃなくて...

鈴木：そうだね、そこを工夫して改善していければいいなと思うね。書けば積み重なっ

ていくし、誰でも見れるから。でも書くこともいいんだけど、指導員たちとも皆さんたちとも、もっと話をしていければいいなと思ってるんですよ。指導員の方はまだ皆さんの名前をわからないでいる。それは指導員が悪いとか良いとかの問題じゃなくて、皆さんが毎日来るわけではないんだから、「あら、あの人名前だれだっけ？」というのが結構あるんだよ。気楽に話して挨拶しながら「先生、実は…」と話してくれたりすれば、顔がつながって、顔がつながれば声もつながる、ということがあるから、事務室（編者註 スタッフルームのこと）に入ってくるときに「おはようございます」「失礼しました」ばかりだけでなく、遠慮せずに、「先生、あの生徒のこともっと知りたいんだけど」とか、そういうふうな積極性をもっと欲しいなと話していたんだけど…。それで、私らの方から学生さんに迫っていくことも大事だけど、「あの学生さん、名前だれだっけ」と言っているうちはまだそうは上手くいっていないわけだから。しょっちゅう来てくれてれば、「あっ、誰々さん来た」とってわかるんですよ。その辺はお互いに上手くやっていければいいなと思ってるんだけど。

### 配付資料解説

豊嶋：ここで、配布資料の解説をいたします。まず、支援学生にどのような変化が自分の中であつたのかを一昨々年からレポートしてもらっています。3、40人分になりましたので、それを重ね合わせると、こんな流れで支援学生が変わっていくのかなという流れ図を、試みに作ってみました。さっき全体シンポジウムで、教師的かかわりと第一次共感といった話をした、その詳しい図です。一応こんなふうに変っていくようだったということで、支援学生の支援者としての発達段階の図と考えてもよろしいです。もし、「あ、まだ私は、こんな段階なのかしら」と思っている人も、まだ支援期間が半年くらい残っているので、これからどんどん先の段階に進んでいくと思います。

もう一つは、去年の学生さんを対象に、かなり詳しい調査研究を心理科の院生がしてくれて、それを相当に複雑な統計的分析法なんですけど、パック分析法というのがある、これを適用した結果を紹介したものです。まず、適応指導教室を支援した体験が学生さんにどんな気づきや変化をもたらしたのかを、一人ひとりの学生さんに箇条書きしてもらいます。次に、箇条書きした項目どうしが、本人にとってどれだけ近いが、似ていると感じるか、本人に類似度評定をしてもらいます。そのデータをパック分析にかけると、例えば箇条書きしてくれた項目が20あったが、統計的には4つのグループに大別されることがわかる。一つのグループに入った項目群はどんな点で共通しているのかを、学生さんに考えてもらう。そうすると、学生さん自身も適応指導教室での支援体験がどんな意味をもっていたのかがはっきり見えてきます。さらに、そのグループについて私どもの方で潜在的な関連性を解釈していくことによって、Aさんの変化、成長はこのような軌跡と構造をもっている、Bさんの場合はこう、ということが明らかになる。簡単にいうと、フレンドシップ事業に参加して「良かった」「こう変わった」といった表面的な効果ではなく、深いレベルでの変化や効果を明らかにしてくれる統計システムが開発されているので、それを適用したんです。それをやってみた結果がこの資料で、典型的と思われる3人の結果です。事例B、事例Cは2年間関わってくれた人です。3人とも初めのうちは「どう動いていいかわからない」という不明確な役割像に戸惑って、一旦教師的関わりで接してみるけれども、「ありのままの自分をだしながら相手を尊重するという関わりが適切なんだ」という発見をしていくのが共通しています。そのあとは人それぞれに変化していくんですが、積極的な関わりを続けたBとCは類似の変化をしています。Bさんでいうと、「尊重的に関わっていくといい」と気づくのですが、子供たちからちょっと攻撃されるとか、生徒の逸脱行動・タバコを吸ったりを目撃するとかをきっかけにして、「ただ単に尊重するんじゃないくて、尊重的関係の内容を詰めないといけない」ことに気づき、「もっと子どもの

内面を理解することが重要なんだ」という結論に達して2年間の支援を終えています。Cさんの場合には、尊重的関係とか内面理解も重要なんだけど、「どうすれば生徒が成長し発達していくんだろうか」というところに観点を据えて子どもを見ていくことを通して、さらに成長していくわけです。これにたいして、折角適応支援体験をしたのにか関与度が低かったAさんでは、「自分をだしながら相手を尊重することでいいんだ」でストップします。こんなところまで分かってきていますが、今後、皆さん(学生に対して)にもご協力をいただくことになると思います。

実をいうと、学校の先生がどう成長していくかということについても心理学的にはよくわかってないんですね。一人ひとりの先生や校長先生は自分の経験からこんなふうに成長していくという印象は持ってるけれども、じゃあ本当に一般にそうか、ということこれはまだわかっていない。適応指導教室の指導者とか派遣学生も変わっていくわけです、先ほどの勉強のこたしか話さなかった元校長先生が不登校生徒に関わっていくうちに変わっていったように。ところが、そうした変化も、一体、何がきっかけでどんなプロセスで起こるのかは、ほとんどわかっておりません。このあたりがわかってくると、支援者や先生方をこちらが支援していくときに、「あ、今はこういう段階なんですよ、ここに気づくところの段階にいけますよ」と言うこともできるようになる。今年度の学生さんにも面接調査へのご協力をどうぞお願いいたします。

6時半までを予定していたので、そろそろ閉会ということでよろしいでしょうか。今日は大変お忙しいところ、いろいろご指摘いただきまして、ありがとうございました。

全員：ありがとうございました。

编者による補足

配付資料はもう一種類あったが、時間の関係で席上での解説は省略し読んでもらうに留めた。学生が観察した子供たちの適応促進要因と適応抑制要因に関する調査研究のまとめである。要約すると、教師的・強制的かわりかわりが子供たちの意欲を殺ぎ、生徒一人ひとりの内面的感情を尊重した「ななめの関係」が適応を促進し意欲を引き出すということに尽きる。